

伝えたい

# まちの遺産

## 旧板取宿

「宿場としての繁栄と茅葺き民家」

古の時代から人が住み、谷間の狭い耕地に水田を作って自給自足の静かな生活を送っていた板取村が、一転して宿場として

繁栄することになったのは、天正6年（一五六七）に柴田勝家が板の木峠の大改修を行ったことに始まります。その後は木ノ芽峠越えの北陸道に代わり、板の木峠越えの北国街道が主要道路となりました。

そのため、参勤交代の大名や一般の旅人など人馬の通行量が多くなり、板取宿は今庄宿の支宿として発展することになりました。当時は宿馬18頭、人足20人が常設され、街道沿いには旅籠や茶屋が建ち並んで、たいそう賑わったそうです。村人はこれらの旅籠や茶屋に雇われて生計を立て、農繁期には田畑で農作業をして生活していました。

慶長5年（一六〇〇）、越前藩主となった結城秀康は、この地に関所を設けて旅人を取り締まりました。常時役人が駐在し、火縄銃や弓矢などを常備して関所破りに備えました。特に板取宿は越前の南端となることから、北端の細呂木宿（あわら市）と並んで最も重要視されていたといふことです。

板取の街道沿いに建ち並んだ茅葺きの民家は、「妻入兜造り型民家」と



▲現在の風景

呼ばれています。街道沿いの限られた土地にたくさん民家を建てようとする場合、必然と間口が狭く奥行き深い妻入型の建物となり、その妻入の屋根の正面を切り上げて造られた「兜」が最大の特徴となっています。この型式は二階の採光・通風をはかるのに最も適しており、またこの地方は豪雪地帯であることから、一階が雪に埋もれた際には二階から出入りできるという利点もありました。民家の間取りもこの地方独特の間取りをしています。この間取りは「二列縦型間取り」と呼ばれ、この街道沿いと木ノ芽峠ふもとの新保宿（敦賀市）の民家にしかみられない大変めずらしい間取りです。

明治19年の敦賀〜武生間の海岸道路（現・国道8号線）の開通や同29年の旧国鉄北陸本線の開通など、時代とともに交通事情が変化すると、北国街道から人の姿が消え、板取宿の繁栄もまた急速に失われていきました。幕末の頃には50数戸あった民家も、現在は平成4〜5年にかけて移築修繕された4戸が上板取地区に残っています。かつての住人はほとんどが離村し、現在の住人は民家で生活することを条件に管理をお願いしている町内外出身の一般の方です。

当時のような賑わいはありませんが、現在は街道の石畳や遊歩道なども整備され、静かに進む民家が周りの豊かな自然と調和して見事な景観を醸し出しています。



▲妻入兜造り型民家の立面図

伝えたい

# まちの遺産

## 門間用水（上野用水）

門間用水は、元和4年（一六一八）上野村（当時は山村）の井元藤兵衛が、福井藩主松平忠直に直訴し、家老本多富正の仲裁を得て造られた用水です。日野川をせき止め取水し、幅約13m、延長約2kmの水路を造る大事業でした。

日野川右岸の日野山から山間のふもとにかけての広々とした平野では、豊かな田園風景が見られますが、かつては水利の便が悪く、作物がとれない荒地も多かったようです。藤兵衛はこうした慢性的な水不足を解消し、土地の生産性を向上させようと用水工事を計画しました。日野川（門間赤岩付近）から上野・三月田までの大工事であり、途中の阿久和川、金粕川では水路を横断させる難工事も予想されましたが、藤兵衛は3年あまりの歳月をかけ、地形を調査して水路の図面を引き、入念な計画を立てました。



▲途中の川には埋め橋を設け水を流していた

しかし、上野村まで水を引くためには鱗波・阿久和・中小屋村の田畑を潰して水路を造らなければならず、当時の上野村（本多領）と他の3村（福井藩領）とが領地違いであったことも障害となり、役所へ用水工事を願い出てもなかなか聞き入れてはもらえませんでした。そのため、藤兵衛は最後の手段として藩主への直訴を決定したので

す。藤兵衛の勇気ある行動と用水工事に対する熱意は、藩主に認められました。直訴から3ヵ月後、本多富正の仲介で3村との用水に関する取り決めがなされ、用水工事が承認されたのです。この用水の完成により、上野村における新田開発の基盤が築かれ、安定した収穫が得られるようになりました。

400年近く田んぼを潤し人々の生活を支え続けてきた門間用水は、日野川用水パイプラインの完成によりその役目を終えました。今では日野川の取水跡付近にある上野用水石碑や上野の栄泉寺に残る藤兵衛の功績碑が、村の発展に寄与した先人の偉業をたたえています。



▲門間用水の推定位置（明治時代の地図をもとに復元）

伝えたい

# まちの遺産

## 妙泰寺と七福神祭

一人々の幸せを願う明神会

永仁2年(一一九四)、鎌倉の日像によって建立された日蓮宗の大谷山妙泰寺は、日像が西大道の地に身延山・山梨県・日蓮宗の総本山がある(の)の面影を偲んだことから、「北国身延」と呼ばれています。寺社の建物は本堂・客殿・山門などの七堂伽藍を備え、山上の七面堂には七面大明神の御尊体が奉られた大変田緒あるお寺です。

この妙泰寺で行われている七福神祭は、今から約200年前、天明年間(一七八一〜一七八九)に起こった凶作や疫病による惨状を救わんとし、当時の住職や村人が七福神に扮し、七難即滅・七福即生を祈願して村内をまわったことに始まると言われています。七難とはすなわち、火難・水難・羅刹難・刀杖難・鬼難・伽鎖難・怨賊難であり、七福とはすなわち、寿命・福德・人望・清廉・愛敬・威光・大量であります。これら七難が無くなったところに七福があると言われ、その七福を人型で表したものが七福神であると言われています。

室町時代末期から信仰されている七福神は、実に国際色豊かな神様の集団です。大黒天(福德の神)・毘沙門天(威光の神)・弁才天(愛敬の神)は印度のヒンドゥー教の神、布袋(大量の神)・福祿寿(人望の神)・寿老人(寿命の神)は中国の仏教や道教の神、そして恵比寿(清廉の神)は、唯一日本の土着信仰から生まれた神で、七福神は神仏習合からなる日本独特の信仰対象です。この7人の神様の中でただ一人、唐の末期に実在したとされる布袋、唯一の女性の神様である弁才天など、7通りの御利益

がある個性あふれる神様として人気がありました。このように、日本・中国・印度と3カ国から集まった七福神ではありますが、日本では特に「商売繁盛」「五穀豊穣」の神として恵比寿の信仰が篤く、恵比寿を奉った神社が日本各地に存在します。有名なのは兵庫県の西宮神社、大阪府の今宮戎神社、京都府の京都多賀止神社で、「日本三大えびす」と呼ばれています。これらの神社で、毎年1月10日前後に行われている祭礼「十日戎」は、古いものでは中世から続けられており、参拝する人々で大変賑わいをみせるそうです。

一方、妙泰寺の七福神祭は、現在毎年9月の敬老の日に開催されています。こちらは恵比寿だけでなく、他の6人の神様も登場し、祭りの前夜にはその年の収穫を祝っての盆踊りが開かれます。当日は七福神が招福訪問で境内や町内各所をまわり、法要では僧侶たちの読経のあと、七福神が出演しての奉納踊りが盛大に行われます。最後に七福神や御神体に乗せた御輿や稚児、参拝者が列を作り、山上の七面堂に参詣して祭礼は終了となります。

「十日戎」と違い、妙泰寺の七福神祭は素朴なお祭りですが、集落に住む人々の心の拠り所として、また交流の場として、今も昔も変わらずに親しまれています。



伝えたい

# まちの遺産

## 郷土の偉人 田中和吉

田中和吉は明治9年(一八七六)今庄村に生まれ、郁文小学校(今庄小学校の前身)卒業後は、私塾での修学とともに家業の荒物商を手伝いながら商法のコツを学んだといわれています。

彼は「少年時代は思いきって遊ぶこと、青年時代にはよく学問をすること、壮年時代には一生懸命に働くこと、老年期には社会同人への報恩に努力すること」を信条とし、勤倅力行・熟慮断行・誠実一貫を座右の銘に実業方面で成功を収めます。40歳を過ぎると、能登物産会社をはじめとして、製糸・電気・運送・建設会社等を仲間とともにわずか数年間で相次いで設立し、郷土の経済発展に尽力しました。また、今庄村会議員、福井県会議員、今庄村鹿森村組合村長などを歴任し、地方自治にも大きく貢献されました。県会議員時代には、「政治は無駄をばぶく」という信条のもと会期中は無遅刻、無欠勤で一度も外泊せず帰宅したという逸話も残っています。

そして、52歳の頃を転機に政界財界から引退し、余生を社会への



▲故田中和吉氏



▲社会教化活動を目的に建設された「昭和会館」



▲明治天皇北陸御巡幸の行在所を保存した「明治館」

報恩に捧げることを決意します。一切の営利事業と名誉職から離れ、私財を投入して社会浄化のための事業を次々と行っていきました。そこです。自分の生まれ育った今庄宿の本陣及び脇本陣であった旧家の土地・建物を購入し、そこに住民のための公園(明治殿と公德園)と、講習・研修・日曜学校など今日の公民館的機能を持たせた鉄筋コンクリート3階建の社会教育施設(昭和会館)などを建設していったのです。

彼は莫大な建設費用を捻出し、諸事業の計画・準備に晩年の全精力を注ぎ込みました。そして昭和8年(一九三三)春、これらの施設を通じて行う社会教化活動の推進母体として財団法人「啓潤会」を設立させますが、そのわずか10日後、それまでの心身の過労のため狭心症の発作により58歳で急逝します。必ずしも長寿ではない生涯でしたが、彼が実践した社会報恩の精神やその偉業は、長く後世に残していきたいものです。

伝えたい

# まちの遺産

あとがき  
 12年半の連載を振り返って  
 平成19年5月号から約2年半にわたって連載してきた、町内の歴史的遺産を紹介するコーナー「伝えたいまちの遺産」は、今回をもって連載を終了することになりました。最終回となる今回は、第1回からの内容を振り返ってみました。

- 第1回「町の歴史概要」
- 第2回「天保年間の造り酒屋―宗藤屋五郎家」
- 第3回「ホノケ山―まぼろしの北陸道」
- 第4回「北前船主の館 右近家」
- 第5回「水環境と歴史的砂防えん堤を活用した地域づくり」
- 第6回「万葉の道が通る山中峠」
- 第7回「宮川・向山家文書」
- 第8回「上野古典立並」
- 第9回「伊藤氏屋敷」
- 第10回「古代の駅家・湊駅を考へる」
- 第11回「藤倉山と鍋倉山―神佛山光明聖遺跡―」
- 第12回「古代の山林仏教寺院―マンタラ寺遺跡―」
- 第13回「絶滅が心配されるターウィンの申し子ヤシヤゲン」
- 第14回「田宮寺の廻廊洞窟(河内)―命の扉と、尊々に感じ入る―」
- 第15回「羽根曾踊り―我が町に残る盆踊り―」
- 第16回「旧北陸線の鉄道遺産―魔のトンネルとスイッチバック―」
- 第17回「春日野道―国道八号の前身―」
- 第18回「木ノ芽味城墓群―北陸道の関門―」
- 第19回「旧石近家住宅西洋館―日本海を臨む北前船主の洋館―」

- 第20回「国史跡 杉山城跡」  
 一、越前国府を望む屈指の天然要害  
 二、ふみがさる中世の館
- 第21回「国史跡 杉山城跡」  
 一、ふみがさる中世の館  
 二、ふみがさる中世の館
- 第22回「国史跡 杉山城跡 三、遺物は語る」
- 第23回「旧国華小学校―ふるさと資料館としての再生―」
- 第24回「特務艦「関東」の遭難―吹雪の夜の温かい人間愛―」
- 第25回「湯尾峠―北陸道の合戦と孫鶴子信仰―」
- 第26回「旧板取宿―宿場としての繁栄と茅葺き民家―」
- 第27回「門降用水(上野用水)」
- 第28回「妙楽寺と七福神祭―人々の幸せを願う明神会―」
- 第29回「郷土の偉人 田中和吉」
- 第30回「あとがき―2年半の連載を振り返って―」

以上が、連載の中で紹介した歴史的遺産です。初回に町内全体の歴史について書き、その後は毎回ひとつずつ紹介し、最終回(今回)をあとがきとしました。スペースが限られていたため、なかなか詳しく紹介することはできませんでした。専門用語や固有名称などにはルビをつけ、わかりやすい文章で説明することを心がけました。これらの記事は町のホームページ(<http://www.town.ninaikeichizen.fukui.jp>)に載せてありますので、いつでも見ることが出来ます。

今回の連載で紹介した以外にも、南越前町にはたくさん歴史的遺産があります。先人の遺したこれらの遺産をどのようにして後世に伝えていくか、それが現代に生きる私たちの大きな課題なのではないかと思えます。

最後になりましたが、連載中の原稿執筆にご協力頂きました方々に厚く御礼申し上げます。